



連載の解説版「もう一つの『発達の中の煌めき』」は、こちらから見ることができます。  
最新の第14回を公開中!

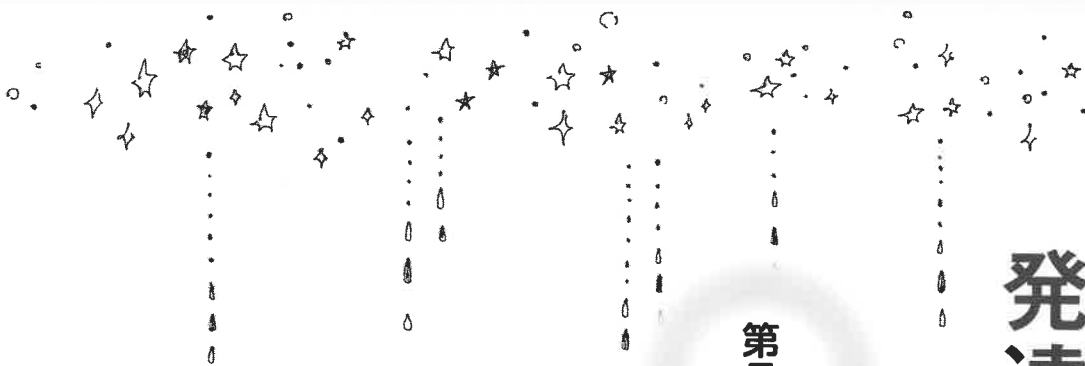
# 発達の中の

# 煌めき

## 第II部

発達の共感が創り出す実践

—歴史に学び、今をみつめ、  
未来を創る



## 白石正久 白石恵理子

しらいし まさひさ / 1957年、群馬県生まれ。小児科  
病院の発達相談員などを経て、現在龍谷大学名誉教授。

しらいし えりこ / 1960年、福井県生まれ。大津市  
発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。

## 第7回 障害のある人たちにとっての文化を考える —文化を享受し創造し発信する

障害者権利条約第三〇条に謳われているように、障害のある人も様々な文化の享受者になるという当然の権利を有します。しかしながら、我が国では、障害のある人がコンサート会場に向いたり、美術館や博物館を利用するには大きなハードルがあります。バリアフリーになっ  
ていない、静かに見たり聞いたりできる人以外は入れない、そうした情報を得にくいといった課題が多くあります。知的障害が重い人の場合には、本人から「行きたい」と要求を発信することは少ないため、支援者の意識がより問われること  
になります。ある支援者は、なかまたちと一緒に美術展に向いたとき、一つの  
絵画の前で、身体中で喜びを表現するな  
かまの姿に驚き、同時に、驚いた自分を  
恥じたと話してくれました。それまでそ  
ういった作品の「理解」は難しいだろう  
と無意識のうちに思い込んでいたのだと。

### 「感ずる心」がある

かつて、近江学園を創った糸賀一雄  
は、重度知的障害のある寛ちゃん、近  
くの農家にある水車小屋で、水車の音か  
ら無数の水玉がキラキラと輝く様子に一  
日中見入っていたというエピソード(学

園では、行方不明の寛ちゃんを探して大騒動でした)や、本物の狂言をみて、ツボにくるとキヤーキヤー声をあげ、手を叩いて喜ぶ姿をみて、理解力や言語力に困難を抱えていても「感ずる世界」をもっていることに気づいていきました。そして「芸術に感動する心は、ひととひとのこまやかな心のやりとりがわかる心であり、愛情と意欲にめざめることのできる心」であり、だからこそ、この子どもたちにも教育が必要なのだ強く確信するようになったと書いています。

障害があっても、すぐれた文化を享受し、自らの感受性をゆさぶり、他者と感動を共有しあえるような条件を整えられていくことは、すべての人にとって豊かな社会を創り出す一歩になるでしょう。

逆に、そうした文化の享受から遠ざけられていくならば、自らの文化を創造し発展させることも困難にさせられることになりません。そして、障害のある人が、あたりまえに文化の享受者になることはもちろん、もっと多様に、もっと豊かに文化の創造者・発信者にもなりうるし、そうした実践や事実を社会全体が認識していくことが必要なのだと考えます。

十五年以上前のことになりましたが、大

津市にある作業所(現 生活介護事業所)で、障害の重いなかまたちのグループが散歩に行く際に、職員がギターを持っていき、着いた公園で歌をうたったり、踊ったりという活動をしていました。大津市内の駅の近くにはたいい噴水があり、その周りがほどよい空間になっているのです。毎週決まった時間に行くので、散歩をしている地域のお年寄りや、ベビーカーを押しながらのおかあさんたちが自然に集うようになってきたことでした。

その話を聞いて、「障害の重いなかまたちも単に文化を享受するだけではなく、文化の発信者にもなれる」と思いました。今でこそ障害者のアートの注目が集まるようになっていますが、当時はそうした動きは一部にとどまっています。文化の創造者・発信者になるというのと難しいことのように考えてしまいますが、なかまたちの生活のなかに、その手がかりや根っこはたくさんあるように思うのです。

### 「文化を手渡す」

では、学校教育ではどうでしょうか。成人期に比べれば、様々な文化、芸術に

出会う機会は圧倒的に多いでしょう。ただ、知的障害のある子どもたち、とりわけ重度の知的障害のある子たちの教育において、「人類の蓄積してきた文化をわがち伝える」ことについては実践的努力が重ねられてきたのですが、「文化と社会の形成者として育てる」という教育のもう一つの側面については頭から難しいとされてこなかったでしょうか。

日本の知的障害児教育は、その当初より生活を重視してきました。一般の小学校で「生活」科が導入されるよりもずっと前から「生活」があり、学校教育法施行規則や学習指導要領における教科等の記載も、まずは「生活」から始まりま  
す。知的障害児の特徴的な教育課程として「教科等を合わせた指導」があるので、その形態の代表的なものとして「生活単元学習」「日常生活の指導」があげられます。こうした教育課程が考えられてきた背景の一つに、生活のとらえ方において社会適応のみを重視し、「教科の学習よりもまずは身辺自立を」「卒業後の生活に役立つことは学ぶ必要がない」といった教育観が横たわっていたことは否めません。

一方で、生活と遊離した知識や技能を